

雑詠日記

海蝶息音

卷の八

二〇二三年

谷川
修



今年は手術をした三年前の体調におおよそ帰った。ただ、くぼんだ目などに身心の衰微を隠しようがない。それでも、日々にいろいろどりを添えるために、この国の古くからの習わしにしたがって短歌や俳句が口から出るのを書きとめる習慣は続いている。たまに生まれかかる詩情をもつとこまやかに正式な詩に書きたいという思いは実現しないままである。二〇二二年も以前と同じくらしい数の文字を書きつけたが、記憶の足しになるばかりで、物の数に入るほどの句ができたとも思えない。ともかく、今年一年の暮らしがどのようなものであったかを記す。

一月一日 門^{かど}に立ち正月祝うコスモスが新しい年^{ひろ}展^{ひら}げ始める

新しい一步を孫と連れ立って

一月三日 COVID 治外の基地にフリーパス従属国に法権はない

一月七日 黙々と街路掃く人冬の朝 (PSAとHEALICの検査結果を聞きに)

三つ目のコスモス開く背戸の門^{かど} 仏語^{ぶつ}で言えば三つの世界 (未大千)

イチジクの下の冬炉に蛙あり夏にやる水溜める壺中に (翌朝救出)

一月十一日 色あせて弱るツツジを打つ霰

一月十五日 刃物ふるう若者のいる国に在る、トッドよこれをいかに読み解く？

鶉の衆の下に幾多の生き物が？

一月二十日

式台に南天白椿縮こまる

(小瓶に二枝、大寒の朝うつすらと雪)

七つ目のコスモス現成開花する

一月二十四日

コスモスに冬の時化あり使命あり

(内海を山々が囲む小宇宙)

一月二十七日

水高生乗せて港を出る船は海よりほかに無い大洋へ

二月一日

唸る風に老軀あおられなお歩む

二月二日

モンテーニュとカントと共に白梅が寒の終わりの時節を語る

二月三日

鬼を討つワクチンを打ち腕まくる

豆を食い身と精神をストレッチ

二月四日
釣り人と朝の寒さを言い交す

我が磯にワカメが芽吹く春まだき腰を下ろした秋桜咲く

二月五日
小雪降る庭に紫、すみれ草

二月七日
足ひれをつけて台船降りる人遠浅の海の何を調べる？

(冷温如何)

二月八日
何台も車輛ロケット連射する演習の名の危うい脅し

タグボート真上に上がる薄煙吐いて動かず春の気を吸う

二月十一日
完結した弧を描く虹へ歩を進む

みぞれ降るチューリップの芽を励ますか

二月十九日
海が呼ぶが雨水の雨に足止めくらう

蜜柑置く翁おきなおうなの住む庭に尋ねて来るよ鳥も夫婦で

二月二十日

雪か雨か決めかねて降る水の精

(雪国の人の苦勞を思いつつ)

齋藤幸平著『人新生の「資本論」』読了。三十代半ばの考え深い人の勇氣ある書。理論的な研究に基づくまっすぐな見解の表明。今の日本の雰囲気きのなかで社会運動を訴える点でも貴重な姿勢だ。後世畏るべし。

二月二十二日

散る小雪気にかけもせず大き船

二月二十三日

行く末に思いを致す齒の痛み

(出品中の書物が一冊送り返された)

二月二十五日

權威主義の歴史を背負うロシアでも反戦デモが自国を非難

二月二十八日

踏切の警報渡る春の海

(全天快晴、齒痛和らぐ)

果樹の枝燃やして春の中に立つ

三月五日

土降つて湾の向こうの陸消える

狭い湾口世界に開く

義勇兵一万六千あるという挫折する国予示し鐘鳴る

三月六日

タグボート船押し寒を押し戻す

三月十一日

ワカメ干しむすびにまぶす浦に住む

三月十四日

赤潮で温む海見て泣く鷗

三月二十日

野イチゴの根茎を抜く作務を為すただ精神をよく放下して

三月二十一日

江海で『哲学探究』春日向

三月二十三日

名ばかりの園丁授粉試みる

權上げて若い水夫ら風まかせ

社会革命と文化革命が起きて三十年以上経つ
人々の感じ方考え方行動の仕方がこれほど変わったのに
一世代以上遅れた様式の戦争が起きている
毎日茶の間のテレビが、建物が破壊された映像を
そして人が殺されただろうことを映し出す
これほど毎日実況放送で戦争を見ることが
これまであったか、あっただろう、しかし
日々人間が死んでいくのを知っているのに
戦争を即時停止すべきだと知っているのに
われわれはどう対処すればよいか知らない
戦争を遂行させているシステムを今も
われわれは有効に停止することができない
同時代史が冷ややかにわれわれの前に提示する
社会システムを変革する革命がまだ必要なことを
わたしは茫然とそれを見つめ、考えさせられる
見通すことも出来ないまま
終わることのない愚かな人間のうごめきを

三月二十五日

よく保て時に押される身心を、まためぐり会う花開く今日

三月三十日

名残花桜に捧げ秋桜

四月一日

街道に桜にぎわう太平記

(兵乱の報しきり。紅旗征戎吾事に非ずや)

四月三日

小麦畑持ち場を護る小日本

(身の回りと世界の出来事を理解していない)

四月七日

老齡を齒に教えられ噛みしめる

四月十日

ムべの花咲き出で今日をよい日とす

(初見、孫に写真を送る)

四月十二日

叔齊のいのちを延べる蕨召せ

四月十六日

連子鯛買おうよ今日の記念日に

四月二十一日

兇族と呼ばれて戦死ロシア兵

戦争に命捧げるほどの国いずこにあるかいくたびも問え

四月二十四日

散る桜追う旅はまず光堂

(老夫婦の記念の旅)

金堂に最後の主の首の桶

四月二十五日

長堤の花見て喜寿を回顧する

上皇と寿命喜ぶ花の道

地異の跡八郎潟に田を起こす

太陽光パネルの傾斜急な地はリンゴの花もまだちらほらと

四月二十六日

筏から見上げて惜しむ残り花

みちのくの小さい藩の大き城

雪冠りしだれ桜を垂らす山

稲の旅たどり北上函館で当麻の米を贈呈される

四月二十七日

この国とわたしの歴史偲ぶ旅思いはやがて散る華となる

人皆がスマートフォンに覗きこむ老人二人黙考自立

(旅の終わり)

四月三十日

故郷の山に萌えたつ照葉樹

(北国と異なる気候終の宿)

五月七日

夏柑をとり入れたあと車座で弁当食べる樹下に幸せ

(友人の柑橘園)

五月十一日

穏やかな一日を得た常人のこれが生きがいしみじみ悟る

五月十五日

梅の木につく害虫を手で拭い老杜甫のごと草庵暮らし

五月十六日

満ち終わり藻屑を供に潮が引く天津動し海は感応

月出でよ円月相を授からん讃歌して待つ紅白の薔薇

五月十八日 おはようとカヌーに声をかける朝海はきらめき五月たけなわ

五月十九日 黄金の花を野に得て客とする
(撲滅対象外来種)

五月二十二日 赤竜が命を賭して道急ぐ
 明日は軀の定めとしても
(道には蟻と人)

五月二十五日 警笛が入り江を渡す紋黄蝶

五月二十六日 ありがたや手を挙げ踊り雨祝え

五月二十八日 一区切りついて授かるグミ光る

五月三十日 零一つ印字し忘れ凡人の力能悟り齡重ねる

六月三日 水張らぬ柵田見棄てる稲荷神

荒蕪地に漁火を撮るカメラ無し
(百選の名がいたましい)

かつて六十ヘクタールあったという棚田も後継者がなくて荒蕪地に。その北に広がる海の漁火も漁獲量の減少もあって減っているにちがいない。六十年余り前狐が夢に現われたと言つて現代文明のただなかで建てられた稲荷社に観光客だけが増える。数少ない有柄銅剣の出土した小さな半島は古代の人口にもどるのか。長くこの地にあった文化は維持できるのか。

六月六日

ハヤブサがリュウグウ土産アミノ酸いのちの素を無事もち帰る

六月十日

返信を読み課植の園で汗流す

(おそらく最後になる論考の発売日)

六月十二日

智慧足りず梨に影成す栗を切る

(昨日梅雨入り宣言)

六月十六日

民草の門かどに蜻蛉せいていもう晴れ間

六月二十日

しくじりを払いキウイがデヴェューする

六月二十一日

山写す海は静まり雨を待つ

(今年も少雨、草木は水を待っている。海も)

梶子は真白予期せぬ訃報あり

六月二十四日

課植園荒地を好む白い虫ウスバハゴロモ優美な呼び名

七月一日

老生がおぼつかなくも分かれ道選んで進む遊戯の世界

(自然と遊戯)

七月二日

疾走するボートが立てた白波はやがて静まり海は瞑想

七月九日

兀としてかぼちやが座る台所

七月十日

稀れ人を待つ著作者の端くれが書を読んで識る世界と人を

『自然と遊戯』が参考文献に挙げる『客観的知識』を読んでいる。

七月十一日

行先の分からぬ船に乗合す修養励み孫よ備えよ

(乱れているか泰西も)

七月十二日

赤潮に河口はあえぐ人口が今年のうち八十億人

七月十六日

公案は「花開世界起」いかに聞く

ワクチンの熱に浮かされ老生は認識過程むなしくたどる

七月二十日

真夜中に冷や汗かいて目を覚ましこの人の身の頼りなさ識る

七月二十一日

値0抗原検査〃風邪でしょう〃

旗立てて漁場ぎよばへと急ぐ海士の舟

藤村の『芽生』が生んだ当惑を喉鼻痛む脳は解き得ず

七月二十二日

日銀の並みに外れた方針が無残に示す為す術無しと

七月二十六日

鬼百合のムカゴを蒔いて来季待つ

非才の苦吟笑う鬼百合

(鬼の歌仙)

七月二十七日

藁の馬担ぐ奇習で虫送り

(二頭の馬はサバーさまと実盛さま)

七月二十八日

知事たちが一列に立ち手を合わす自立の人が消えうせた国

七月二十九日

涼やかな姿の陶器外は夏

(萩の県立博物館)

山門の影で経読む法師蟬

八月四日

肌脱ぎの背に夏陽射し受けて立ち葡萄と梨の実りを祈る

八月七日立秋

テレビが言う冷やした房で蟄居せよ

白桔梗蝶の回路を目覚めさす

八月八日

打ち水に蜂が一刺し泣き叫ぶ

八月十二日

栗が落ち暑さと渴き訴える

八月十九日

大メジナ八尾が集い秋の入り

待ちかねた秋気翼にカモメ飛ぶ

八月二十五日

孫に送る小ぶりのナシを穫りましょう

八月二十八日

シャツ落とし青北海を染めて吹く

九月四日

嵐待ち道に散り敷く葛の紅

予期したか道に斃れた野のイタチ

九月八日

秋日和横断歩道渡る猫

(ゆっくり、のどかに)

九月十日

サックスを伏せて聴く犬河口岸

尖塔が名月分かつ古都の今

九月十五日

暑気凌ぎ快気を祝う曼殊沙華

(二年目で検診終了)

九月十六日

単一の主題で虫は鳴き明かす揺るぎも見せず一途な生よ

九月十九日

外国の女王の葬儀実況でテレビが映す国家の時節

一昨日、P・マクフィーの『フランス革命史』を読み終わったばかり。

九月二十日

イガ落とす嵐に栗は花咲かす

モニユメント壊れ地上に鯨の子

九月二十六日

青鷺が今日は夫婦で彼岸明け

月日不詳落首

ガイコクノシセツヲマモルケイビヘイイツナクナリシソレホドノヒト

ダレニモセヨヒトハシズカニホウムラレルガヨロシカロウ

見識を欠く国悼み秋暮れる

九月尽く

隼が天下の秋を俯瞰する

政権の実務者・責任者は国家の破綻を予期しているに違いない。

十月一日

ルーシでは兄弟の地を支配下にタタール以来歴史の軌

十月六日

水鳥と息の長さを競い合う御身の身過ぎ幾春秋か

十月十二日

漁業者が数えるほどの港町、船具電器の商店閉じる

県内北浦第一の漁港だった町から、漁業やいくつもの生業が消えていく。一つだけあったが二十年もほったらかしになっていた旅館が今ごろ解体されている。空き家も増えている。この町はいつたいたいどうなるのだろうか。

十月十五日

押し寄せる海外客がこの国の貧しいことを何より明かす

どの顔で国の舵とる者たちはこの失政を言いつくろうか

十月十八日

母子遊ぶ公園の隅権拾う

(この実が食べられると存知か)

十月二十三日

晴朗な天まで届くヒヨの声

(稀人拙著を求めぬ)

十月二十六日

秋日和荒神様の御祭礼、榎の実食べて実りを祝う

帝国で新法党が権力を獲得する場ビデオが録画

(天網恢恢・・・)

十月二十八日

秋の日にピエロが二人シーソーでこのコスモスの機密を語る

十一月一日

タデ・ヨメナ書齋に活けて珈琲を飲む

ツワの花眺め庭師と茶話咲かす

十一月三日

夷・斉にも勝る至心と能力を国に捧げた人あると知る

人物叢書『川路聖謨』(川田貞夫著)を感激のうちに読了。その尽力は
つまるどころ、この国に暮らす人々に捧げられたのだ、と思う。今日、政

府は、北朝鮮のミサイルに空襲警報発令。思慮なく世論を軍備拡大へ誘導。

十一月五日

友が立てた句「対岸の地山より立つ秋の虹」へ和して

第二案

対岸の地山にもみじ描く虹

色彩を加える

第三案

海出でて秋の山越え虹の橋

定家の春の歌「夢の浮橋」への返句

第四案

海に立ち秋を彼岸に渡す虹

季節が移りゆく

食卓で大きザクロが灯す赤

持参の品への応答の句

十一月七日

太陽光パネルを囲むスキの穂イチヨウ並木が輝く野道

江汐湖に鴛鴦ふたり冬立つ日

藩政期、湾を埋め四百町の田、奥に堤。

天と地の恵みのアケビ手に包む

(手植えの)

十一月八日

地が月を月が天王食う時節

老夫柘榴で齒を血の色に

十一月九日 覇権国選挙迷走従属の国は道づれ事変へ向かう

十一月十三日 紅葉踏み盤石橋を渡るシテ

蜘蛛逝つて光る鞆韃守る紅葉

十一月二十一日 爛熟し冬の赤潮耐える都市

十一月二十二日 孫の観るテレビドラマは別世界、浦島太郎はわたしと告げる

十一月二十八日 速足の散歩、枯葉の駆ける音
(朝陽、天地快晴、朔風ならぬ強い南風)

十一月二十九日 わたくしを迎えて浄化虹の門

十一月尽日 寒風に耐え海渡るヒヨの群れ

「道草」の亭主アラカブを今朝も釣る

十二月六日

見島見てカマスのフライ冬の昼

めまいしてトンネルの先抜けられず内耳の機微が人を立たせる

十二月九日

霜の田の霜立ち昇れ日の布告

(山々を背に田畑と野に白い蒸気が)

冬空にメタセコイアの線描画

十二月十日

厨房に朝陽の映す我が影がわたしの頭と示す輪郭

鶺鴒の衆は朝日をめざし空翔ける

十二月十三日

年納め祝詞のりとが風に堂しろの代

十二月十四日

「人工の核融合炉入力を超えるエネルギー出力した」と

(AFP吉報)

初雪がしばしとどめる温暖化

落首

遠い地の戦に惑いこの国の衆愚が向かう同じ禍わざわい

過去の失敗と同様に政治家や官僚が愚策と判っている方針を採用。

十二月十八日

めまい者が雪舞う海辺風流する

十二月二十一日

異次元の世界などなしこの世には

(日銀が異常な金融政策の修正)

聡明から遠い耳と眼老い生きる

十二月二十三日

雪しきり余生の運転試される

十二月二十六日

ガラス拭く書齋に光満ち溢れよ

十二月三十日

四人よつたりでデコポンをもぐ小晦日こつこもり

(五十個あまり)

十二月三十一日

鐘の音と往く年渡す舵手は蝶

二〇二三年 正月
白江庵 謹製



「歩出夏門行」

曹操

神亀寿なりと雖も

猶お竟くる時有り

騰蛇 霧に乗るも

終には土灰と為る

老驥 櫪に伏するも

志は千里に在り

烈士の暮年

壯心已まらず

盈縮の期は

但だ天に在るのみならず

養怡の福

永年を得可し

幸甚 至れる哉

歌いて以って志を詠ぜん

